

A-18 老年期の食生活に関する研究(第1報)

東筑紫祖大 納身節子の田村くに子 神原信子

目的 老令人口の増加(日本:60才以上の人口比:1955年8%→1995年18%予測)と核家族化は、社会問題に発展している。老年期は家庭外に拡大した生活空間が縮小し、徐々に家庭に戻る時期といえる。しかし今日の家庭環境は社会変動の影響をうけて、老年者の生体変化や心理的危機の克服のゆきを喪失しつつある。又独居老人世帯(演者らの調査地区で人口千人に対し0.48%)も増加の傾向にある。老年期における社会・家庭との結びつきの弱まりは、老年者の役割喪失感・孤立・孤独感を招き老化→疾病→死へつながる結果となろう。演者らは老年期の健康事象を食生活に視点をあて、関係要因として、過去の生活環境と現在の家族関係などから食事 pattern の現象分析を行い問題点の探索を試みた。

方法 対象・福岡県北の元産炭地域で家庭に生活し、老人クラブ・老人福祉センターにおける65才以上の♂83人・♀93人・計176人である。老人の環境要因と食事 pattern (項目指数化)を個人別肉診法により行った。4要因(性・年令差, 家族構成, 健康厂・職業厂)との関連から分析し、変量分散の検定を行った。

結果 過去の健康厂(頑健・病弱)と職業厂は老年期の食習慣として特徴的な食品消費 pattern を形成する要因の一つであった。現在の家族構成と性・年令差は、食品によって個人差が顕著であった。元産炭地域の老年者の食事 pattern と要因の関係を分析したが、今後地域 type 別の検討を行う必要を認めた。